

私の研究史

森田良行

1. 文学から文章の問題へ ——学生・院生の時代——

研究とは、我が身の置かれている環境やその身の携わる職業と密接に関わりあうものだ、定年を間近に控えて、つくづくそう思う。そうでなければ到底、この年になるまで、日本語研究一筋に生きては来られなかったであろう。私が日本語に関心を持ち始めたそもそものきっかけは、文学の創作を通して、いかに言葉を効果的に綴り、日本語に命を与えるか、文章としての完成が即日本語の完全なる凝集となるための基本ルールとはいったい何なのか、文学と言語との本質的な相互関係を何とかつかもうと、それのみを目指して日本語の、否、言語の本質論へと関心が広がっていったのである。時枝誠記『国語学原論』を読んだのは、そのころ、つまり高校3年生のころである。文学として文章を考えていく場合には、当時流布しつつあった文章論、順接とか逆接とか補足とか添加・転換という展開の型の跡づけや、頭括式・尾括式・追歩式・列挙式などという文章の全体像のタイプを分類整理する、このような方式の学問ではその真実に迫ることは困難だと直感的に感じ、何とか実学的な新理論を打ち立てることは出来ないものか、本気で考えていたわが青年期であった。早稲田の国文科を選んだのも、文学と語学とを兼ねた学問の出来る大学と考えたからである。

さて、時枝誠記『国語学原論』で言語過程説に接し、話し手・書き手からの表現行為による発信が、聞き手・読み手へと伝達され理解されるその流れの過程を言語行為としてとらえる考え方に大いに共鳴し、文章分析にそのような視点からメスを入れていくとしたら一体どうなるか。読み手を意識した「書き」の行為こそ文学創作の行ないであるから、表現過程を表現者の行為として眺める文章分析法があってよいのではないか。そう考えると、これまでの、展開方式の型の分類や文章内容の全体的組立を類型化する学問が、実にナンセンスに

思われてならなかったのである。たとえば

○朝早く家を出た。(), 目的地に着いたのは昼過ぎであった。

の括弧の部分には「そして、だから、しかし」など、いろいろの接続詞が入り得る。話者の叙述内容に対する把握の態度、目的地までに要する時間や距離を話者がどのように心理的に受け止めているかなどが、結果として括弧の展開部に現れる。接続部を類型化するのではなく、文脈に沿って理解していくことこそ正しい文章分析の態度ではないのか。「しかし」で繋がる展開だから逆接だというレッテル貼りだけでは、ただ言語リストとして“「しかし」は逆接”という国語辞典的解説にすぎなくなる。表現・理解行為に沿って眺めていくなら、同じ「しかし」の文脈展開でも、

○この新薬は劇的に効く。しかし、副作用の心配はまったくない。

○この新薬は劇的に効く。しかし、副作用の心配がある。

は、それぞれ表現者の意図に差が見られる。前者は、“劇的に効く新薬ならば当然、副作用の確率も高かろう”という相手の予想を想定して、それを否定するのに対し、後者は“劇的に効くなら結構だと思うだろうが、たとえ薬効著しくとも、副作用の危険度が高いのだから使用は考えものだ”という思惑を裏に秘めた心理的な逆接。前件の「劇的に効く」から受ける相手心理の読みと、後件の「副作用の心配がある」の言葉の裏に潜む言外の表現意図。価値評価の観点から言えば、前者は「効く」から連想する危険度の高さ「-」予想に対し、その心配はないと「+」評価で相手を安心させ、後者は薬効著しい「+」の印象に対して副作用という「-」の危険性を言い添えて“だから使用は思い止まるべきだ”と言外に伝える。「しかし」を使って文脈にひねりを利かし、相手や話者の心理をみごとに描き出す。この裏の心理を切り捨てるなら、前者は「しかも」、後者は「だから」で言い換えていっこうに差し支えない。これは後に問題とする連文論へと発展していく萌芽なのだが、このような表現における意識の流れを跡付けずして何が文章分析だと、そのように考えたのである。

それが筆者の学生・院生時代の研究に対する心構えであった。それを卒業論文『国語における文体の研究』、修士論文『文章論』にまとめ、その後、以下の論文で世に問うた。(括弧内は発表誌と発表年を示す。)

☆「文章論と文章法」(国語学 1958)、「曲流文の文体論的考察」(文体論研究1964)、「接続詞の機能」(国文学研究1967)、「しかし——発生と展開」(ことばの宇宙 1968)

2. 表現者の視点に立つ——国語教師時代——

大学院から離れて高校の国語教師になり、教育現場で文章の読解作業の指導を担当するようになると、表現者の立場からの創作行為よりは、読み手の側からの理解過程を考えることに眼が向いていくようになる。と同時に、作文指導を通して表現行為がいかにあるのかを実践的に見ていくようにもなる。両教育に共通している点は、言語を表現の手順・流れとしてとらえ、それを辿ることによって実践的に展開の姿や機能を把握していく訓練であるということだ。ディスコースなどという概念のまだ無い当時、時枝学説の“辿り読み”を手掛かりに、「文章」を言語表現の行為そのものとして、国語教育の経験の中から、どのような学問的分析の方法論が組み立てられるか、暗中模索の時代であったと言える。そのころ次の諸論文を発表して、以上の問題を具体的に作品論として展開した。国語教育の現場にあった関係から、必然的に古典文学を対象とした文章分析が多いのも、止むを得ない。

☆「灌仏の比私考」(古典 1960)、「徒然草を主題とした文章論の展開」(国文学研究 1961)、「文章表現 展開と文脈」(国文学研究 1965)

3. 転移論の提唱

——国語教育から日本語教育へ、日本語教師時代の幕開け——

表現や理解を当人の主体的行為として実践的に眺めると、その文章の執筆者たる書き手と、登場人物、この両者の視点が読み手の視点とどう重なっていくかが、問題となる。それを手掛かりに文章分析を行なう術はないものか。このような観点が当然のことながら生まれてくる。そして、この視野において文章を仔細に観察していくと、文脈の中に、ある特異点の存在することに気が付い

た。次の文を見よう。

彼はつつ立ったまま、その旗をしきりにうち振る。汽車はもう見えていた。旗は機関手の目にはいらぬとみえ、ぐんぐん汽車は近づいてくる。ここまで来たらもう最後だ——百間あまりの距離では、あの重たい列車が止められるものか！
(ガルシン『信号』)

初めは傍観者の立場から「彼」と「汽車」の関係を眺めていた視点が、「ぐんぐん汽車は…」あたりから「彼」なる人物の目に乗り移って、旗手の目を通して事態の推移をとらえていく。「ここまで来たら…」以下はまさに「彼」自身の感懐で、読者が登場人物の立場に移行し、登場人物の目で起こるべき事態を把握し、当人の心になって思考を展開させる。「…近づいてくる。ここまで来たら」と「行く」ではなく「来る」を用い、「あそこ」と言わずに「ここまで」と登場人物の視点を基準に地理的關係をとらえている。このような「行く」や「来る」、コソアの指示の表現などは表現機構の転換を示す指標とも言うべき語群であることを発見し、そうした語彙を中心に分析を進めていけば、そこから表現に際しての場面・時間・人物における視点の転移が突き止められるはずだ。そこで、かような分析法を転移論と名づけ、言語表現の分析に有効な理論であることを実証的に提唱した。話者と登場人物の視点を問題とする学的態度は、今日では時のダイクシスなど当たり前の問題となったが、当時は誰も考え及ばぬ風変わりな理論であったに違いない。

☆「言語表現型と文脈断層の助詞」(国文学研究 1959)、「転移論と文章法」(月刊文法 1969)、「文章分析の方法」(応用言語学講座 1985)、『言語活動と文章論』(明治書院 1993)

4. 文章論から表現論へ——初級教科書作製時代——

外国人に対する初級日本語教育の現場に立つと、それまでの国語教育とは違って、いやでも一対一の対話・問答を繰り返す毎日となる。話し手と聞き手の言語行為の分担、談話に必要な場面の細かな設定とそれらの総合の上に成り立つ言語活動の有り様が、常に頭のなかで反芻され、問題意識として重くのし

かかってくる。そのような毎日の教育活動から、言語活動の成立要件と予想されるタイプとが自ずと胸のうちで整理されてきたのである。すなわち、聞き手をあくまで他者たる相手として発信する対相手意識の言表。パターンプラクティスなどで教師対生徒の間で繰り返される問答。“私対あなた”の関係で、これを対立型と命名した。一方、聞き手も含めて「私たち」と意識する発話もある。聞き手を己れの縄張りに取り込んだ一体感に根ざす発想で、計画の打ち合せやグループ討議の場などでしばしば見られる言語活動の姿でもある。これを融合型とネーミングし、話し手・聞き手の二者関係から二つの発話のタイプを弁別した。これはあくまで発話者の認識の問題で、このような表現意識の在り方から発想を分析する、いわば表現論的視点から言語のさまざまな姿を眺めることにより、それまで説明のしにくかった諸現象が、かなりはっきりと見えてくることに気が付いたのである。文法的な現象にとどまらず、語彙的な意味の問題にも有効な切り口がこれによって見出だされるのではないか。折しも語研の日本語教室では、毎年夏に日本語教育の公開講座が開かれるようになり、筆者はこの観点から日本語の諸現象を取り上げ分析して講演の責務を果たしていったのである。そのころ発表した論文で以上の分析論を踏まえたものに次の諸論文がある。

☆「指示語の指導」(講座・日本語の文法 1967)、「条件の言い方」(講座日本語教育 1967)、「〈行く・来る〉の用法」(国語学 1968)、「〈ない〉の用法を中心に」(講座日本語教育 1969)「感動詞の変遷」(品詞別日本文法講座 1973)、「指示語の扱い方」(講座日本語教育 1982)

5. 表現論から文法論へ —— ひきつづき初級授業担当時代 ——

対立型が「私」の目で「あなた」に向き合い、融合型が「私たち」の目で対象に向き合う関係だとすれば、話し手が聞き手もしくは話中の人物に転移して、その人物の目で事物をとらえる人称転移型は、「私」「私たち」の垣を越えた「自分」の視点で見る“超人称”の表現だといえる。さらに、現実の時や所さえも超える時空間の転移は、「今」「ここ」の視点が表現者の視点と重なりあう、時・所のダイクシスと見てよかろう。このような観点から種々の文法現象を切ることによって、従来の品詞論的文法論では説明のつかない文法的解釈が可能

となってくるはずである。日本語表現の根本問題の諸相を表現論的視野から見直すと言えば大げさになるが、新しい解釈が成り立つことは確かなように思えたのである。例で示そう。日本語のアスペクト表現の一つと言われる「～ている／～てある」の解釈で、従来「窓を開けてある」のようなヲ格を他動詞で受けるテアル表現は、他動詞に引かれてヲ格をつい用いてしまった誤用であると説明されてきた。正しくはガ格で「窓が開けてある」のように言うべきだといっているのである。しかし、本当にそうであろうか。それにしては「を」を用いた～テアル表現は意外と多い。しかも、文脈を仔細に検討してみると、(つまり連文レベルで場面や文脈的意味、話中の状況把握をしている表現者の心理内容などが、)ガ格の場合とは明らかに違いが認められるのである。たとえば、いつも用心深い友人の家を訪ねて、同伴者に「ほら、鍵が掛けてあるだろ」と言ったり、突然訪ねて「や、困ったな。鍵が掛けてある！」と独り言で叫ぶような場合は、ガ格を自動詞で受ける「～ガ掛かっている」と言い換えてもよい。一方「鍵を掛けてある」のほうは、「女一人での暮らしは何かと物騒なので、普段は鍵を掛けてあるんですよ」のように用い、「～ガ～ている」文型との差し替えは利かない。この違いを先の言語表現のタイプに当てはめてみると、「～ガ～てある」文型は、外在状況に直面して、それを己の意志とは無関係な実情として把握する「私」の視点。相手に伝える対立型とも、独り言のような融合型とも、どちらとも取れる。一方、「～ヲ～てある」文型のほうは、ある理由に基づいてあらかじめ対処しておく当人の立場に、話者が転移しての対立型表現。ガ格は現象を受け止めるこちら(私側)の視点。ヲ格は現象を作る当事者の視点に話者が立つ。当事者は私でも彼女でも誰でもよい。

このように対立・融合・転移の概念を文法論に持ち込むことによって、さまざまな文法事象が新しい観点から見直せることとなったのである。そのころ取り上げた問題として次の諸研究がある。

☆「動作・状態を表す言い方」(講座日本語教育 1968)「動作の起こり方を表す語について」(講座日本語教育 1971)「〈本が置いてある〉と〈本を置いてある〉」(講座・正しい日本語 1971)

これらは日本語のテンスやアスペクトに関する研究で、「～ている／～てあ

る／～ていく／～てくる／～てしまう／～ておく／～た」の問題を突き詰めていったのが私の助教授時代であったと言える。特に「～ている／～てある」の研究の必然の結果として、自・他動詞の問題と助詞「は／が」との関係へと関心に移り、さらに格助詞と文型との相互関係へと発展していくのである。

☆「文型と助詞——ハ・ガの用法を中心に——」（講座日本語教育 1972），
「複文の文型練習」（講座日本語教育 1975），「文型について」（講座日本語教育 1976）

6. 文型論からの発展，格文法に踏み込む —— 中・上級授業担当時代 ——

日本語教育に携わっていた関係上，日頃から文型に対する関心はひととき高かったのであるが，ハ・ガの分析を通して文の形と助詞との相関に関心に移り，さらに進んで，種々の格助詞と述語動詞との相互関係へと視野が広がる。いわゆる動詞の格支配，結合価文法のはしりとも言える。たとえば動詞「飾る」なら，

①AデBヲ飾る。／②BニAヲ飾る。／③Aヲ飾る。

の3種の文型が考えられ，それぞれ，①「リボンで髪を飾る。」②「棚に人形を飾る。」③「有終の美を飾る」と，文型ごとに結合すべき助詞の組合せが異なり，「飾る」の意味も，①は「AでBを美しく見せる」，②は「Bの場所にAを置いてAを引き立たせる」，③は単に「プラスの状態に持っていく」といった文脈から来る表現的意味に差を生み出す。これが後の意味研究へと発展していくのだが，表現論と文型論の両面から語義を眺める姿勢は，この段階で身につけてきたと言ってよい。格関係を問題とするため，動詞文型中心にならざるを得なかったのも，また止むを得ない。

☆「日本語動詞における格支配と意味」（語研10周年記念論文集 1973），「動詞文について」（講座日本語教育 1974），「日本語の動詞について」（講座日本語教育1977），「日本語動詞の意味について」（日本語教育 1982）

7. 意味論的文法研究の地固め —— 『基礎日本語』の執筆開始 ——

文型論の研究が引き金となって、動詞文の問題へと興味が移り、述語動詞の意味に文型が深い影響を及ぼすことを突き止めるに至った。文型論に根ざす文法研究が進んで、いつしか意味論の領域へと足を踏み入れていたのである。例を動詞「選ぶ」で説明しよう。「選ぶ」には「太郎に嫁を選ぶ」のような「AニBヲ選ぶ」と、「花子を嫁に選ぶ」つまり「CヲBニ選ぶ」との2種の文型が認められる。前者は“複数の中から該当候補を選択する”ことであり、後者は“特定の者を該当者として選定する”ことを意味する。同じ「選ぶ」でも文型によって意味する内容に微妙な違いが見られるのである。そして、前者の“選択”を意味するほうを「選ぶ1」とし、後者の“選定”のほうを「選ぶ2」としよう。「選ぶ1」文型を取るものとして「探す」があり、「太郎に嫁を探す」と言える。一方、「選ぶ2」では「決める」が相当し、「花子を嫁に決める」の言い換えも可能である。これら二つの文型を「探す」「選ぶ1」グループと、「選ぶ2」「決める」グループとで役割分担をしている点も面白いが、語義を文型との連動ととらえる考えに立つことによって、「探す／選ぶ1／選ぶ2／決める」という意味の体系、すなわち、まず対象となるべきものを搜して、その中から該当しそうなものを選択する。そして、特定の何かを選定し、それに決定する。搜し選択する段階と、選定し決定する段階とで截然と文型が二分される。このように文型と語義と語ごとの親近関係が見事に把握され、文型論と語義論と語彙論とが手を結ぶこととなる。文法研究が意味論へと発展していったというわけである。この経過からもわかるように、意義素にこだわる構造的意味論とは無縁であった。

ちょうどそのころ、国際交流基金からの派遣でインドネシアへ1年間出張し(1978)、その4年後には中国の北京大学へ1年出掛けることとなった(1982)。長期の海外生活を経験し、言語の不可思議さとその言語特有の意味・文法の有り様とに深く思いをいたす日々を送ったのである。

☆「動詞〈囲む〉の提起する意味論上の問題について」(木村宗男先生 記念論文集1982), 『日本語の類意表現』(創拓社1988), 『動詞の意味論的文法研究』(明治書院 1994)

8. 日本語意味論の体系づくり —— 大学院講義担当時代 ——

そのころから、意味分析の方法を模索するようになり、従来の単語中心の意義素論的意味分析を批判的に眺めるようになってきた。文型や文脈の観点に根ざした新しい意味分析の方法はないものか。日本語意味論の体系づくりを目指すとともに、大学院での講義科目を担当するのをきっかけに、授業で直接それまでの研究過程をぶつけ、臨床的に意味記述を検証してみたのである。折しも角川書店の小辞典シリーズで基礎語の意味・用法を克明に記述した著作を求めるとの注文に接し、これを機会にそれまでの教育経験の中から得た資料をもとに、種々の品詞にまたがる意味分析の実践的内容の辞書を作成した。それが案外と好評を博し、日本語教育のバイブルとして愛読されることとなったのは幸いであった。

☆『基礎日本語 1』(角川書店 1977), 『基礎日本語 2』(1980), 『基礎日本語 3』(1984), 「語の意味分析・記述の方法」(講座日本語学 1982), 『語彙とその意味』(アルク 1991), 『意味分析の方法』(ひつじ書房 1996) (後年、『基礎日本語』は3冊を合本して『基礎日本語辞典』(1989)として再出発した。)

9. 表現分析的語義論から文義論へ —— 誤用分析への発展 ——

『基礎日本語』は、版元の注文もあって表向きは語彙レベルでの解説書の体裁を取っているが、分析内容はむしろその語の置かれた文脈や文型の観点からの意味把握に徹底している。すでに文レベルでの意味記述であり、格支配や文中での共起関係に目配りした解説書となっている。背景には、その語が成り立たない非文となってしまう条件を探り出し明示することに狙いを絞って、意味分析を行なう姿勢があるからなのである。この姿勢に徹すると、自ずとその語を含んだ文全体の意味(すなわち文義)が問題となり、それと文を構成する個々の部分との因果関係から、それが誤用かどうか定まってくる。日本語教育では特にこの問題は重要で、外国人の作る日本語に誤用例が頻出するのをおかしく矯正するか、その根拠を学問的に提示することが現場教師に求められている。それに応えるためもあって、誤用分析方法論を意味論的文法研究の副産物として編み出していったのである。折も折、寺村秀夫氏より雑誌「日本語学」

に誤用分析を連載してほしいとの依頼を受け、求めに応ずることとなった。
(1983～84)

☆『誤用文の分析と研究』(明治書院1985),「誤用例から日本語の性格を考える」(国文学 1987),「語の意味と文の意味」(文化庁「言葉の意味」1991)

10. 連文論への自ずからなる移行——大学院ゼミ担当時代——

文の意味論を考えていくと、その行き着く先は「文」ではなく、文の連鎖、すなわち「連文」となる。情報は一つ一つばらばらに切れて、1センテンスずつに独立していくわけではない。まとまりをつける情報の束は文のレベルを超えて連文となり、時に段落へと発展する。特に両義文であれば、文意の解釈は隣接センテンス(広義の文脈)への依存度は倍増する。例で見よう。今「彼は来ないと思っています。」という文があったとする。この場合、

①彼は来ないと思っています。彼はいつも欠席ですから。

②彼は来ないと思っています。彼女はいつも欠席ですから。

の2例を比較すると、①は後続文で彼の欠席の多さを明示することによって、来ないのは「彼」なる人物であることがわかり、したがって「彼は来ない」で一まとまりとなり、「そのように(ある人が/または私は)と思っています」と受けることになる。一方②は、欠席の多さが彼女ということなので、先行文の内容も「彼は(彼女が)来ないと思っている」という意味になる。先行文の「思っている」の主体が他者や話し手自身(私)とも、文中の「彼」とも、どちらにも解釈できる両義文であるための結果なのだが、連文単位の視点で眺めれば、文義が明瞭となる。文の意味の曖昧性が隣接する文で補いあっているというわけである。なお、これが「彼は来ないと思う」なら、話し手自身の意見①の解釈しか成り立たない。

☆「連文型」(『談話の研究と教育・Ⅱ』1989)

11. 日本語発想論への展開——正しい日本語への関心——

連文論を追究していくうちに、単に2文間の意味関係だけではなく、先行叙述を受けてどのような文へと展開していくのが日本語として自然な姿か考える

ようになり、さらに進んで、文章・談話のスタートラインでもある冒頭文にどのような事柄が現れ、情報を展開させていくか、そのような問題へと関心が移っていった。日本語の自然な発想を考えることである。そして、これは逆に日本語表現のブラッシュアップへと役立つ知識ともなるはずである。日本語らしい日本語を目指すきっかけともなる。語彙レベルを超えて文法さらには文章のレベルにまで入っていく未開拓の問題でもあった。

☆『日本語の発想』（冬樹社 1981），『日本語の表現』（創林社 1983），『日本語らしさ』（現代英語教育 1986），『日本語をみかく小辞典 名詞篇』（講談社1987），『同 動詞篇』（1988），『同 形容詞・副詞篇』（1989），『言葉をみかく』（創拓社 1991），『日本語をみかく』（PHP 1998）

12. 日本語論から日本文化論への飛躍 —— 定年を間近に控えて ——

日本語らしさ・日本語の発想を突き詰めていくと、行き着く先は日本文化そのものの問題である。言葉はその民族の文化の産物であり、言葉と文化は切っても切れない深い繋がりを持つ。外国語と比べていかにも日本語らしい特徴を、語彙・意味・文法の枠を越えて発想の奥にまで立ち入って眺めると、日本民族共通のものとのとらえ方・考え方に行き着き、それが個人の生活行動だけでなく、民族共通の生活様式や社会の構造、芸術・スポーツ・娯楽の面に至るまで、根を共通にする文化的共通性に辿り着くのである。どうやら言葉（日本語）は、「言語」という狭い領域に閉じこもって論じあっては埒の開かない、広大な裾野を持つ学際的な研究対象であるらしい。まだそれらの諸領域を覆う広義の学問にまで辿り着いてはいないが、その入り口ぐらいまでは行き着いたようだ。

☆「日本語の発想と論理」（日本語学 1984），『日本語の視点』（創拓社1995），『日本人の発想・日本語の表現』（中央公論社 1998）

13. ついの住みかは文章論 —— 定年後の展望，結びに変えて ——

日本語の発想から文化との関連を求める一方、連文型の発展として談話・文章をとらえ、若き時代の視点中心の文章研究とは別に、文化的観点から文章を眺め、言語表現を広義の表現活動の一部として位置づける研究。言語を超えた

マクロの視点で文章表現を分析する研究。それが今後の課題でもある。文章論からスタートして文章論に帰る。帰巢本能であろうか。

☆筆者は2000年1月20日、「私の日本語研究」の演題で最終講義を行なった。
本稿はその折の草稿である。